

育つということ 育てるということ



若 者

北 河 康 隆*

What is education ?

Key Words : University Education, Student

ここ数年、家庭菜園がブームなのだそうである。東京ではマンション暮らしの方々のために、ビルの屋上などに貸し農園が作られ、また郊外に畑を借り、電車や車で移動して週末農業にいそむ方も多いと聞く。小さい田畑ではあるが、富山県の兼業農家の長男として育ちながら、農繁期にすら帰省して手伝うこともなかなか儘にならない小生としては、いささか複雑な心境である。しかし、小さなベランダでハーブなどを嬉しそうに育てている妻をみていると、やはり多くの人にとって、植物（農作物）を育てるといのは楽しく、また収穫するという事は喜びなのであろう。小生は高等学校までを実家で過ごしたが、あまり田畑の手伝いには積極的ではなく（今となっては両親に申し訳ない気持ちである）、この様な場所で多くを語れる程詳しくもないが、それでもその一端を見てきたつもりである。それに免じて、どうかこの小論をご海容頂きたい。

さて、農業は大変である。無論どの職業も大変であることに違いはないのであるが、すこし趣を異にするという印象を持っている。その大変さの多くの部分は、農政に起因しているような気がするが、ここではあえてそれを論じず、作物を育てるということに論点を絞りたい。作物を育て出荷し、消費者へ届けるという点で、農家は生産者である。この構図



(写真1 ベランダで育ったワイルドストロベリーと我が家の次女)

は産業界における工業製品のその仕組みと何ら変わりはない。しかしメンタリティーとしては、より子育てに近いものがあると思う（工業製品開発者もきっとそうかもしれないが）。私も2児の親となり、40歳も手前になって、ようやく少しずつではあるが親の苦勞やありがたみができるようになってきた。色々妻に任せきりの小生が言う台詞ではないかもしれないが、さすがに我が子だからこそ、こなせているのではないかと感じてしまう。

しかし、農作物を育てるといのもまさに同じではないか。稲作で例えてみたい。稲作で特筆すべき点は、水の管理であろう。昔より、水利権が採め事の種となるほど、水は稲作にとって生命線である。生育状況に合わせ水田（以下、田んぼ）の水量を適切に管理しなければならない。結果、毎日朝晩田んぼの水を調整する必要がでてくる。天候により水路からの引き水の量を変えるのはもちろん、水の温度が低ければすこし水路を長めにとり暖めるなど、きめ細やかな対応が必要となるのである。しかも、田んぼには1枚1枚地形上の個性があるため、田んぼごとに、毎日毎日、春先から夏の終わりまでこれを行うのである。台風の襲来時、水路を見に行つて落命される方がいらっしゃるが、これも水の管理の



* Yasutaka KITAGAWA

1975年4月生
大阪大学 大学院理学研究科 化学専攻
博士後期課程 修了(2003年)
現在、大阪大学 大学院理学研究科 化学専攻 量子化学研究室 助教
博士(理学) 量子化学
TEL : 06-6850-5405
FAX : 06-6850-5550
E-mail : kitagawa@chem.sci.osaka-u.ac.jp

ためである。わざわざこんな時に、という意見もあるかもしれないが、もし、雨に打たれた我が子だとすると、放ってはおけないであろう。いわんや田んぼを残して夏休みに家族全員が揃って海外旅行など、農家ではあり得ないのである。

しかし、なぜそこまでして農作物を一生懸命育てるのか。それはひとえに少しでも良い作物（商品）を出荷し、消費者に届けるためである。そのために、生産者の努力があるのである。それでは、良い商品とはなにか？ この点は議論の余地があると思っている。例えば良く耳にする話ではあるが、日本人は特に商品の見た目に五月蠅いらしい。外国では、多少いびつであったり傷が付いていても普通に売られているが、日本ではそうはいかないという。最近では、完全ハウス（温室）栽培の工場生産野菜も出てきており、見た目が美しく均一で、そして安定した生産が見込めることから、盛んに導入されつつあるようだ。家庭菜園をすこしでも経験のある方はご存知であると思うが、普通に育てるとすぐ葉が虫食いで穴だらけになる。まして傷ができたり、いびつになったりなどは気にしてられないし、味にはさほど変わりはないと割り切っている（小生の菜園の腕がその程度であることは、この際棚に上げておく）。しかし、両者がスーパーに並んでいたら、やはりハウス栽培の方を選んでしまうのではないかと思う。その方がなんとなく安心するからである。

ところがである。翻って人間で考えたとき、“温室育ち”という言葉は、あまりよろしくない言葉なのである。つまりは、野ざらしでも、そして虫穴だらけであっても、実をつける強い個体であれど。種が落ちた場所が、たとえ道ばたやいばらの中であったとしても、その環境に適合し育つ強者であれど。しかし、これは育てたのではなく、育った結果である。むしろ、育ててそこまで強くなった訳ではない。小生は大学で教鞭をとるものとして、ここが非常に悩ましい。

大学とは人材育成の場である。高校を卒業した若者を教育し、そして社会へと輩出する場である。次世代の日本を、ひいては世界を支えリードする人材を育てることが、大学の使命である。しかしそもそ

も人材育成とは何か？ ひとつの考え方として、「大学は人材の生産者であり、採用して頂く企業はお客様である」というものがある。いうなれば、生産者（大学）はお客様（企業）の方を向き、ニーズに即した、あるいは先取りした商品（学生）を提供しなければならないのだ、と。そう断言する私学経営者も出てきているようである。まあ一理あるが、それだけでは些かさみしい気がするというのが現場の人間としての意見である。第一、学生は実に多様である。真面目でコツコツタイプもいれば、瞬発力タイプもいる。器用な人がいれば、不器用な人もいる。プレゼンテーションがうまい学生がいれば、口下手な学生もいる。これが人間というものである。その学生の多様性をうまく生かしながら、どのように育てていくか。大学に限らず企業でもどこでも、担当者の悩みの種であろう。

もちろん、（手前味噌ではあるが）同僚教員一同、毎日学生を我が子のように気にかけて、丁寧に指導していると思う。時に学会前の忙しい最中でも、嵐の中の水田を気にする農家のように、我が身（発表）を顧みず学生のスライドを添削していると思う。しかしその中で、“虫穴だらけでも実を結ぶ野菜”のような強い人材をどのように輩出するのか。もしかすると、なんとなく安心するという理由だけで、完全ハウス栽培の野菜ばかりを育ててはいないだろうか。常に留意したいと考えている。

地下資源の極めて少ない我が国において、人材こそが唯一の資源であると言われ続けて久しい。その大切なプロセスの一翼を担う小職としても、重責ではあるが大変やりがいのある仕事であると感じている。小論が、「若者」というコラムへの寄稿としてふさわしいのかどうかは分からないが、大学という場で学生と共に過ごしている若輩者のつぶやきとして読んで頂けると幸いである。閉塞した社会を打破する様な強い人材、未来を創る人材は、育つのか、あるいは育てるのか。残念ながら小生には、まだその答えは見つけられていない。

拙稿を書いている現在（4月初頭）は就職活動のまっただ中である。内定をいくつもとってくるすばらしい学生もいれば、大阪大学といえども、なかなか決まらない学生もいる。しかし、常に学生と接している立場として、必ずしも内定をとれない学生が

悪い学生であるとは限らないと思っている。往々にして企業とのミスマッチや勉強不足も見受けられるが、毎日リクルートスーツに身をつつみ、研究室から出かけ、戻ってまた研究を続ける学生を見ていると、よく頑張っていると感心する。確実に小生の拙い指導以上に成長しているようである。嗚呼、やはり勝手に育つのか。否、小生の後ろ姿の賜物なのか。いずれにせよ、彼らに心からのエールを送るととも

に、その前途に幸多からんことを切に願う。

最後に、この拙文執筆の機会を与えて下さった久保孝史先生（大阪大学・大学院理学研究科・化学専攻）、ならびに「生産と技術」のご関係の皆様へ、心より感謝申し上げます。今年も学会と田植えが重なってしまって、親孝行ができないことを嘆きつつ筆を置く。

